

日本組織培養学会

昭和52年12月31日発行

会 員 通 信

第 33 号

発行責任者・☆佐藤温重・梅田誠
☆☆加納永一・☆☆丸野内棟
☆横浜市南区浦舟町 横浜市大 医学部
☆☆京都市東山区山科御陵 京都薬大
☆☆町田市南大谷 三菱化成生命研

§ 昭和53・54年度幹事選挙について

幹事選挙が別紙の要領で行われることになった。投票を忘れずに行ってください。

§ 第45回研究会開催について

翠川修世話人のもとで行われるが、シンポジウムのテーマについて、世話人から下記のような通知があった。

第45回研究会は京都で開催されます。現在その準備が進行中で、前回に引き続き外国人講師による講演を企画中です。その実現如何により日時に多少の変更があるかも知れませんが、予定のスケジュール等は次の如くです。

世話人：翠川 修氏（京大・医・病理）

会 期：昭和53年5月29日（月）、30日（火）

会 場：京大薬学部講堂及び楽友会館

シンポジウム：“組織培養のガン研究への応用”

上記事由により今回の通信には確定日程をお知らせできませんでした。正確な情報と演題申し込み用紙は3月発行の会員通信によりお届けします。どうぞよろしく御協力下さいますようお願い致します。尚、第45回研究会に関する各種御注文、お問合せは下記へお願い致します。

問合せ先：翠川 修、阿達 敏博（京大・医・病理）

（電話 075-751-2111内4425）

§ 幹事会議事録

1977年9月25日 於 東大医科研

幹事会は上記の日時場所に於いて開れた。出席者は現幹事、ビブリオグラフィ担当者、会員通信担当者、会計担当者、今期研究会世話人（勝田甫）、次期（翠川修）及び次々期研究会世話人（三宅端）の諸氏であった。

議題は以下の通り審議された。

(1) 次期研究会について

世話人 翠川 修氏 京大病理

日 時 1978年5月29日～30日

シンポジウムのテーマ Application of Tissue Culture in
Cancer Research.

場 所 京大薬学部及び楽友会館

(2) 次々期研究会について

世話人 三宅 端 氏 三菱化成生命科学研

日時場所 1978年秋 町田市

詳細未定

(3) 外国人名誉会員の推せんについて

幹事会は、日本組織培養学会へ貢献の著しい外国籍の組織培養研究者を当学会外国人名誉会員に推せんし、その承認は総会の審議を経て決定する事を申し合せた。

これに伴い、今期研究会に招かれて講演した外国籍研究者を名誉会員候補に推せんした。

(4) 新入会希望者について

新入会希望者の申請書類を受けつけ調査の上その承認を総会に求めた。

(5) 幹事選挙について

幹事選被選挙人名簿を改訂し、年末に発行予定の会員通信と同封で選挙用書式一式を会員に郵送する。投票用紙は1978年1月末日迄に、幹事長研究室迄返送してもらう。

(6) 会員通信担当者について

丸野内棟氏(三菱化成生命研)に担当者として加わっていただく。

(7) 学会への寄付金申し出について

(a) 勝田甫前研究会世話人から80万円の寄付金の申し出があり、有難く頂だいする事にした。

勝田氏はその用途について、将来外国人研究者が本学会研究会に講演発表の為来日する場合の旅費に充当するよう希望して居られる。

(b) 合同酒肴より、毎年若干額の寄付の申し出があり、有難く頂だいする事にした。

(8) 会員名簿の改訂について

名簿の様式は原則として現行通りとし、末尾にABC順に人名索引をつける事にし、作業は幹事長の所で行う事にする。

以上各議題を審議し、総会へ送った。

§ 総 会 議 事 録

1977年9月26日 於 東大医科研

下記の各議案を御承認願いました。

(1) 次期研究会について

世話人 翠川 修 氏 京大病理

日 時 1978年5月29日～30日

シンポジウムのテーマ Application of Tissue culture in
Cancer Research.

場 所 京大薬学部及び楽友会館

(2) 次々期研究会について

世話人 三宅端氏 三菱化成生命研

日時場所 1978年秋 町田市 詳細未定

(3) 外国人名誉会員の承認について

幹事会の推せんを受けて別項の通り承認した。

(4) 新入会員の承認について

次号掲載予定

(5) 幹事選挙について

年末発行予定の会員通信に同封して、選挙用書式一式を郵送する。投票用紙は1978年1月末迄に幹事長研究室迄返送してもらおう。

(6) 会員通信担当者について

丸野内隼氏(三菱化成生命研)に担当者として加って頂く。

(7) 学会へ寄付の申し出について

以下の受け入れを承認して頂く。

(a) 勝田甫前研究会世話人から、外国人の来日講演発表の際の旅費の一部に充当するようにとの希望で80万円

(b) 合同酒精より毎年若干額の寄付申出

(8) 会員名簿改訂について

名簿改訂の年にあたります。前回会員通信で、1977年10月31日迄に記載事項に変更ある人は葉書で加納迄御連絡願うよう会員各位に連絡し、又一部の会員及び幹事の方々にも御助力願ひ、一応原資料をそろえましたので出来るだけ早く発行致します。

(9) Bibliographyについて

会員を著者に含み、培養を内容に含む論文をacceptされた会員はそのTitle、著者名、誌名、巻号頁、年度(1976年及び1975年度で同年度のBibliographyに掲載されていないもの)及びAbstract又はSummaryを、type又はcopyして川崎医大病理の難波正義氏あてに送る事。なおすべて欧文にする事。

Bibliographyの世話をして頂く方々は、乾直道、難波正義、及び佐藤茂秋の三氏です。

Bibliographyの海外送り先について御意見のある方は上の三氏に連絡して下さい。

§ 第44回研究会の御報告

日本組織培養学会第44回研究会は、東京大学医科学研究所の勝田甫教授を世話人として、1977年9月26、27日に、医科研講堂に於て開催されました。26日は一般演題を募り、応募された演題の中から8題を選んで、昔通り演説30分、討論15分のプログラムを組みました。27日は国外から5人の演者を招き、組織培養における動物細胞の栄養要求をテーマとしての国際シンポジウムにいたしました。

当日の参加者は、受付を通った人数でみると、会員98人、非会員89人、ここ数回の研究会の参加人数に比べると、会員参加者はやや多く非会員参加者はやや少ない人数でした。

しかし会場が定員約200名の医科研講堂でしたし、九月末の東京にしては例年にない暑さの中の2日間、熱気あふれる感じの会でした。御出席、御協力下さった皆さま方に心から御礼申し上げます。

今回、研究会の1日を国際シンポジウムにあてたことは日本組織培養学会として、初めての試みでした。その講演内容、討論については単行本を出版する予定で準備しておりますが、開催にこぎつけるまでの具体的な経過を御報告しておきたいと思います。

〔1976年5月28日〕(第41回研究会総会席上にて)

1977年秋の研究会・世話人に決まる。

この時点で国際シンポジウム開催を考える。

テーマについて

勝田本人の研究分野としては、試験管内悪性化の問題、栄養要求、正常細胞と悪性細胞の相互作用などが考えられるが、試験管内悪性化の問題では新鮮味のない顔ぶれを集めることになりそうだし、正常と悪性の相互作用は演者を集められそうもない。そこで栄養要求をテーマにすることに決定。現在、日本ではイーグルのMEM、ハムのF12、RPMI-1640、モーガンの199、NCTC109などと輸入処方による合成培地が広く使われているが、それらの培地がどのような哲学のもとに、どのような実験経過を経て作られてきたかを考えて使っている人は少ない。これらの培地を開発された人の中には、モーガンのようにもはや亡くなられた方もあり、他の方々も相当のお年寄りが多いから今のうちにお招きして講演して頂こうではないかという事になった。

財源について

先ず日本学術振興会の補助が考えられる。補助額100万位——これは少なすぎる。参加者80人——これも少なすぎる。それに52年度の申込は51年5月末なのでもう間に合わない。

同じ日本学術振興会の日米科学協力事業による補助。これは52年秋開催なら52年2月末に申込だから間に合うし、演者の旅費も心配ないが、補助して貰えるか否かが決まってくる準備する期間が短かすぎる。それにクローズの会で培養学会全員の参加は無理である。あと内藤財団、山田科学振興財団等いくつかあてになりそうなものもあるが、どれも諸経費の一部の補助しか望めない。結局、賛助会員諸社の寄附に頼ることにふみ切った。

〔1976年11月12日〕(第42回研究会総会席上にて)

国際シンポジウムのテーマ公表

〔同年12月9日〕

ドクター・イーグル、ハム、サンフォード、ウエマウスへ招待状を出す。

〔同年12月13日〕

賛助会員に寄附お願いの書状発送。

〔同年12月27日〕

ドクター・サンフォード快諾の返信。
〔1977年1月4日〕

ドクター・イーグルより快諾の返信。
〔同年1月10日〕

ドクター・エバンスへ招待状を出す。
〔同年1月14日〕

ドクター・ハムより快諾の返信。
〔同年1月24日〕

ドクター・エバンスより快諾の返信。
〔同年2月26日〕

ドクター・ラナディブへ招待状を出す。
〔同年3月3日〕

ドクター・ラナディブより快諾の返信。
〔同年3月24日〕

ドクター・ウエマウスより快諾の返信。
これで招待演者は全員予定通り出席されることになった。
〔同年3月31日〕

賛助会員からの寄附金は次々と振り込まれこの日総額248万円。
〔同年4月13日〕

ドクター・エバンス、サンフォード、ハム、ラナディブ、ウエマウスの往復旅費を日本航空へ振り込む。

ドクター・イーグルからは旅費ふりこみを少し待つてほしいとの再信。
〔同年7月25日〕

ドクター・イーグルから出席出来なくなったとの通知。

ドクター・イーグルの弟子である東レ基礎研究所の小林茂保氏にイーグル培地の紹介をピンチヒッターとして講演して頂きたいと依頼。

〔同年8月11日〕

抄録集を印刷所へ。

〔同年8月18日〕

東レ小林氏が急性膀胱炎で入院の報。

〔同年8月26,27日〕

抄録集発送。

〔同年9月1日〕

東レ小林氏の代演を東大薬学部・山田正篤氏に依頼。ピンチヒッターのピンチヒッターで無理なお願いだっただが快よく引き受けて下さる。

会 計 報 告

入金	寄 附	5,232,000 (36件)
	当日参加費	421,500
	銀行利息	20,236
	計	5,673,736
支出	外国演者旅費	2,003,000
	同上 宿泊費	220,000
	同上 記念品等	1,147,300
	抄録, 諸通知印刷代	427,300
	演者用椅子(6コ)	77,000
	スライド・プロジェクター	89,700
	郵送料	111,000
	懇親会費	251,240
	諸雑費	180,700
	計	4,507,240

会場は医科研講堂にしましたので、会場費が0でした。東京でホテルや経団連の部屋を借りますと、2日で100万から200万円は支払わねばなりません。

会場費を節約した分から記念品代を捻出しました。演者各位にはシンボルマークのデザインで楯を、参加者全員には同じデザインのネクタイピンをお贈りしました。いづれも七宝です。

抄録は全部写真製版にしましたので、予定より安価にすみました。活字を組ませると倍額近くかかります。

医科研の講堂の椅子は坐り心地がよいといえるものでなく、おまけに机との間隔が固定されていて、どうみても偉丈夫、女丈夫の招待演者が坐ってられそうもないと思われましたので、演者用の椅子を6コ購入し最前列に並べました。この椅子とスライドプロジェクターは医科研へ寄附しました。

郵便料金は思いのほか高かったです。

今回は寄附に応じて下さった賛助会員諸社に無料で、機械、ガラス器具、薬品の展示をして頂き、抄録集に広告を入れませんでした。展示場では、日本光学、オリンパス、ツァイス、ライツの倒立位相差顕微鏡に人気がありました。これらの顕微鏡の性能を公平に評価できるように、同じ容器に培養した同じ細胞をのぞけるように手配しておいた事がよかったです。

シンポジウム終了時の収支決算では前表のように約117万円の黒字でした。そこで単行本

の出版に関する経費などを残して、80万円を日本組織培養学会へ寄附いたしました。これは将来に又、国際シンポジウムを開く費用の一部に使って頂ければ幸甚です。大げさな会を企画しなくても外国から演者を一人でも二人でも招いて、英語で討論する機会を多くすることは、日本の若い研究者にとってよい勉強になると思いますから。

支出の中に人件費は全くはいつておりません。これは横浜市大の梅田誠氏とその研究室の方。専売公社生物研の乾直道氏とその研究室の方々。予研の広川康子女史とそのお弟子さん。勝田研究室で培養技術を学んで巣立ったの方々。合計すると30人近くの方々が、それぞれの部署において、又臨機応変にお手伝い下さったからにはほかならない事を書き加えておきたいと思えます。

最後に、国際会議にそなえて、医科研講堂の整備に力を貸して下さった医科研の諸先生、(昔からの医科研講堂を御存知の方は、今回の講堂で演壇が新しくなったこと、カーテンが新しくなったこと、マイクがよく聞こえた事などお気づきでしょう。)看板書きや会場作りを快く引き受けて下さった医科研事務の方々、そういうかげの力に支えられてこそ私共の会が成功したことを、改めて感謝をこめて御報告いたします。

(文責 東大 医科研 高岡 聡子)

§ 編集後記

会員通信冬号をおとどけます。32号から編集方針を少し改めて Technical report などを加えて多彩な内容をと考えておりましたが、怠慢で原稿を集めることができず、本号は従来通りとなってしまいました。

本号の編集から丸野内隼氏が新たに加わり編集担当は4人となりました。1978年度は新しい視点の加わった通信をおとどけすることができるものと思えます。本年も最終号となりましたが、これまで原稿執筆などで御協力下さった諸兄にお礼を申しあげます。

(S)